

保育ドキュメンテーションを媒体とした保育所保育と 家庭の子育てとの連携・協働に関する研究

研究代表者	鬼塚 和典	（熊本藤富保育園 副園長）
共同研究者	北野 幸子	（神戸大学大学院 准教授）
	矢藤 誠慈郎	（岡崎女子大学 教授）
	永田 久史	（第二聖心保育園 園長）
	田中 啓昭	（もくれん保育園 園長）
	梶沢 幸苗	（中居林こども園 理事長）
	坂崎 隆浩	（こども園ひがしどおり 理事長）

研究の概要

- ・保育のドキュメンテーションが保護者と保育者の子育ての連携・協働の役割を果たすツールとして効果的であるかどうかを検証するためドキュメンテーションを作成する（以前作成したものも可）
- ・作成したドキュメンテーションの内容を保護者と共有するために、園の保育室を活用しドキュメンテーションを説明する場を設ける。
- ・今回の研究に協力を申し出た園の保護者各5名～10名が参加する。職員は園によって自由に参加だが、保護者に圧迫感を与えない配慮から、参加職員は司会と説明する職員と書記の2～3名を基本とする
- ・話し合いの場の環境設定としてテーブルを丸く囲む方式にし、できるだけ自由に発言できる環境を整えお茶などを準備し、雑談形式をとる。
- ・集まった保護者に担当者が保育のねらいや内容、子どもの育ちを作成したドキュメンテーションを提示し説明する。
- ・保護者の発言を同じテーマでまとめ、保護者の発言の内容を整理する
- ・保育のドキュメンテーションが保護者と保育者の子育ての有効な媒体としてどのような効果を発揮するかを分析する

キーワード：有効なコミュニケーションツール、子育てへの協働意識の向上、保育所保育の全体を見る冷静な視点の獲得、保護者、保育者、子どもが一体となったPDCAサイクルの確立、保育所保育と保護者及び保護者同士の連携の構図の構築

1. はじめに

保育科学研究で継続してきた「保育のドキュメンテーション」は、日本の幼児教育及び保育事情を鑑み、いわば日本式保育ドキュメンテーションのシステムを考案し、その効果を多方面に求め研究したものである。

本来の「幼児教育のドキュメンテーション」はイタリアのレッジョエミリアを発祥とし、アートカリキュラムの活動とその経過を継続的に記録し可視化しながら、カリキュラム達成への道筋を教育者、保護者、地域が共有し、協働しながら次のステップを目指したものである。それらはイタリアの戦後の教育事情や歴史を踏まえて出来上がって来たものであり、保育事情が異なる日本においてこのシステムをそのまま保育現場に取り入れるには多くの問題を解決しなければならず難しいものがある。

しかしながら「ドキュメンテーション」の本来の意味

である「情報を収集して整理・体系化し、記録を作ること、可視化すること」はこれからの幼児教育をより充実させ、その内容を保護者と共有し幼児教育の内容向上と子育て支援の牽引としていくには、有効な手段と考える。

子どもの成長を目的とした施設（以下、こども園、保育所、幼稚園を言う）と保護者と言う直線的な関係だけではなく、施設からの発信が保護者同士の関係にも広がり、その関係が施設や子どもに戻るという円の関係を作り出し、施設における日々の幼児教育を理解するだけではなく、保護者も共に施設の教育を考えるという発展的協働作業に繋がる構図が出来上がっていく。

今までの研究の流れと必要性

保育総合研究会としては保育ドキュメンテーションを使った研究は4回目であるが、第1回目の研究では保育ドキュメンテーションが保育所保育の重要性の理解を保

護者に発信する方法として、どのような有効性を持つかを検証した。第2回目は保育所保育の専門家としての保育士の資質の向上を目的とした保育ドキュメンテーションの効果を検証した。3回目においては、保育ドキュメンテーションが、保護者の子育て観や保護者の育児能力の牽引に有効な影響をどのような形で与えられるかを検証し、4回目の今回は保育ドキュメンテーションが施設の行う幼児教育の内容を保護者と共有し、それにより子育ての連携・協働をより深めることができ、保育ドキュメンテーションが園と保護者を結ぶ有効な仲介者の役割を果たすための活用方法を探りその効果を検証する。

今回の研究の目的

子どものためのより良い教育と子育てを目的とした保育者と保護者の連携、協働のための仕組みを構築するために、ドキュメンテーションがどのように役立つかを明らかにする

2. 連携・協働の媒体としてドキュメンテーションに期待する機能

2-1. 家庭との連携の必要性

「核家族」の増加が進行して久しいが、近年ではさらに共働き世帯やひとり親・婚外子など、家庭の多様化が目立つようになってきている。それに伴い、家庭では子育てのノウハウを学ぶ機会が少なくなり、子育ての仕方がわからず悩んだり、保育に対する自信の喪失からの子育てブルー・保育放棄・児童虐待など、家庭の多様化の結果として家庭での保育・教育の機能が低下していく傾向にある。かつては、大家族では祖父母がその下の親世代へノウハウを教え伝えたり、地域においては近所ぐるみで子育てを手伝ったりすることで保護者は子育てに対する知識を得ながら実践できた。近年の情報化社会ではインターネットやSNSで子育ての情報を取得したり交換はできるものの、子ども一人ひとりには個性がありかつその個性は多様であるが故に、得た知識のみで子育てを実践することはなかなか困難である。

子どもを保育所に入所させている家庭において、子どもの保育・教育を施設に一方的に依存するだけでは望まれる子育ては実現できない。子どもに対する保育・教育は24時間継続するのであり、保育・教育が保育所と家庭の一体となった協力の元になされなければならないことを意味する。これが「保育所保育と家庭の子育てとの連携・協働」である。連携が適切になされるためには、保育所は施設における子どもの的確な情報を各家庭に届ける必要があり、家庭においては届けられた情報を考慮しながら子どもに適切な保育・教育を施す。よりの的確な情報を届けるためには、保育者は子どもの状況の理解はもちろんのこと、子どもの保護者を理解することが前提であり、そのための保育技能・知識の向上が期待される。

また家庭に対しても、保育所から得た情報を理解しそれを元に家庭での保育・教育を適切に施すことができるように、あらゆる機会に保護者への子育て支援を実施することも重要である。

2-2. ドキュメンテーションの機能

ドキュメンテーションとは、一般的には「文書や書類を証拠として示すこと。またそのような文書を作成すること^{※1}。」である。保育におけるドキュメンテーションは、一言で言えば保育実践の記録である。

日々の保育は、保育者が事前に作成した指導計画のもとに実践されるが、実践の記録として保育ドキュメンテーションを作成することで、子どもの活動は予想どおりだったか、指導のねらいは達成できたか、指導上の留意点は妥当だったか、実践結果の自己評価はどうか等、保育者にとっては指導計画を検証できるツールとして機能する。更に、ドキュメンテーションに子どもの活動の様子を視覚的に記録する（すなわち写真や動画を挿入する）ことで、子どもにとっては自分の活動（多くは遊びとして）を記憶する手助けとなり、記録を振り返ることで自己を内省し今後の行動・活動を豊かに発想することができる。また、ドキュメンテーションを保護者にも届けることで、個々の連絡帳による通信では得られない、保育実践によって成長していく子どもの姿を知ることができる。これらを踏まえて、ドキュメンテーションを単に時系列の活動記録として構成せず、子どもや園内の他の保育者・保護者の目にとまることを考慮して簡潔に見やすくわかりやすいものとするのが重要である。

このように、ドキュメンテーションは単に保育者が保育実践を内省するため以外にも、保育を受けた子どもが自分や他の子どもの活動を見なおしたり、保護者には集団活動の中での日々の子どもの様子や周囲の子ども・保育者とのかかわりや保育所の保育実践についてその内容を保育者と共有することができる強力なツールである。

2-3. 連携・協働の媒体としてのドキュメンテーションの機能

我々保育総合研究会より「保育ドキュメンテーション」という単語を発信し始めてから5年目を迎えている。当初、ドキュメンテーションを作成する目的の主となっていたのは、家庭の養育能力の低下に対して対応したいという願いであった。専門家により保育を行っているある日常を、目に見える画像を通して保護者に報告し、そのとき子どもに何が育っているのかを発信し、子どもの育ちを保護者に受け止めてもらえることを願ったものであった。

そのため、ある時から「子どもたちの育ちが保護者の理解に繋がるように」という目的へと方向性が少し変化し、少し押し付けがましく、ともすれば教えてあげるという上からの視線があったことは否めない状況となって

いた。

しかしながら、発信することを苦手としていた保育業界の中で、発信を具体的にを行う取り組みであり、苦手としたまま行動に移さないところが大多数である中、実践したからこそ見いだせたものであり、その中での反省点として保育者からの一方的な発信となっていないかとの考察から、保護者からの何らかのリアクションをいただく「双方向」が思考の方向性となり、保護者からのリアクションがいただけるような設えとして「いいねシール」の試みがなされた。保育者からの発信に対しての保護者からのリアクションであり、既読確認ともなり、その研究結果は前回の研究として報告されている。

この試みを経る中で、「双方向」へ向けた次のステップとして、保護者からの生の声を聞く試みに発展した。これまで保育者側より発信され伝える手段であったドキュメンテーションが、互いに話し合うための機能をもつ連携・協働の媒体となる可能性が見いだされるのではないか。その検証として、以下の実践へと続く。

3. ドキュメンテーションを活用した連携・協働の実践

3-1. 連携・協働実践の概要

ドキュメンテーションについての話し合いを保育者と保護者で行ない、それぞれの立場が明確になるように左右に段書きし、経緯をつかみやすいようにした。

記録簿には日時・参加者（保育者○歳児担任●名、保護者○歳児●名）・ドキュメンテーションの内容・配布回数の欄を設け、話し合いの経緯を記載した。

3-2. 記録の方法

参加者とは別に記録者を配し、発言内容の主な部分を要約し、記録簿に記載した。

3-3. ドキュメンテーションの構成

今回は一般的な伝え方より話し合いのきっかけづくりとなるように、ドキュメンテーションの裏側に隠れてい

「ドキュメンテーション」についての話し合い記録簿	
日時	平成28年 ○月 ○日（ ） ○時 ～ ○時
参加者	○歳児保護者 ○名 ○歳児保護者 ○名 主幹保育教諭 ○名 ○歳児担任 ○名（保育教諭経験年数 ○年） ○歳児担任 ○名
ドキュメンテーションの内容	テーマ「 」
配布回数	年○回 （掲示用…年○回 ）
話し合いの経緯	
保育教諭側	保護者側の反応
①ドキュメンテーションを提示して説明する。（苦労したところ、楽しかったところ、驚いたところ、育った力など）	
②説明後、ドキュメンテーションの内容に対して聞きたいこと、感じたことをお茶を飲みながら話してもらう。	
③その他、ドキュメンテーションに対しての質問や希望を聞く。	

る事柄をあえて示さず、話し合いの中で「実はこんなことが…」と話せるように構成した。

3-4. ドキュメンテーションの活用の仕方

ドキュメンテーションを題材に話し合いを持ち、保護者が見た後日の感想を主に、その中の意見の紹介を行なった。

3-5. 連携・協働実践

3-5-1. 実践において記録すべき項目

- ①連携・実践のねらい（期待する保護者の姿、保育教諭の姿、関係性の変化）
- ②連携・実践の日時
- ③連携・実践の参加者
- ④連携・実践で活用したドキュメンテーションの概要
- ⑤連携・実践の経緯（話し合いの様子）
- ⑥考察（実践を実施してみた感想、得られたこと等：子どもの姿の共通認識、保護者との関係性、保護者の意識の変化、保育者の学び等）

3-5-2. 連携・協働実践の具体例

実践1：こども園あおもりよつば

①連携・実践のねらい

毎日の食事の様子を見ていると、苦手な食べ物が多い子、好き嫌いせず食欲旺盛でいつもおかわりをする子に分かれます。苦手な食べ物も少しずつ食べられるように、保育者は園児及び保護者にして食の大切さを伝え家庭との連携をとることができるのか。

②連携・実践の日時

平成28年10月22日（土）15：30～16：30

③連携・実践の参加者

1歳児保護者	1名	2歳児保護者	1名
3歳児保護者	4名	5歳児保護者	1名
3歳児担任	1名（保育教諭経験年数 24年）		

※記録者として主幹保育教諭が同席した

④連携・実践で活用したドキュメンテーションの概要

はつか大根を育てることにより、生きている野菜、生きている自分、生きている自分が健康であるためには何が必要か考え、それらの様子を保護者に伝えることによ

保育教諭側	保護者側
①ドキュメンテーションを指示して説明 内容・子どもの姿について ●はつか大根を育てることにより食物に対する興味の変化 ●生きている物を食べているという自覚が芽生え食の大切さを知る	○ドキュメンテーションの資料を見ながら、説明を熱心に聞いていた。
②説明後の様子 ●日頃の子どもの様子を伝えるとともに、家庭での食事の様子を伺う ●生きていくためには、食物は水と太陽、では人は・・という問いかけをした様子を伝える ●ドキュメンテーションについて意見を伺う	○家では嫌いな物でも、ひと口は食べさせるようにしている ○家でもミニトマト、枝豆、きゅうりを植えてみたら自分でトマトを採ってきてそのまま丸かじりして食べていた ○家でアサリの砂抜きをしていたら飼うと言い出した。 ○家では食べない物を園では食べていると聞くので、どうして園だと食べるのかなあ？と思ってしまう（同様意見多数） ○ドキュメンテーションを見て園での様子を写真と内容で知ることができる
③その他、ドキュメンテーションに対する意見・希望等 ●意見交換会を各クラス1年に1回はもてるようにしたらどうか ●ドキュメンテーションを通して園での様子を保護者の方にわかってもらい共通の話題からよりコミュニケーションを深め一緒に子育て・子育てを考えていきたい	○今回のドキュメンテーションの資料のようにプリントして配布してもらえると嬉しい。送り迎えがあまりできないので、園での様子を知る機会になる

り保護者自身も食について考えようとする。

⑤連携・実践の経緯（話し合いの様子）

⑥考察

一番強く感じたことは、同じ話題で保護者と話し合うことの大切さ。また当たり前のことだが、園での様子を保護者に伝えることの大切さである。

またドキュメンテーションを通して園児自身が考えたり行動したりすることは、園児の気づきの質を高めるものであり、それは小学校に行ってから主体的学び、対話的な学び、そして深い学びにつながっていくものと考ええる。

ドキュメンテーション・そして保護者との話し合いは、園児の育ち、そして保護者支援に関わる大切なものである。

実践2 もとしろ認定こども園

①連携・実践のねらい

（期待する保護者の姿、保育教諭の姿、関係性の変化など）

②連携・実践の日時

平成28年10月8日（土） 9：30～10：30

③連携・実践の参加者

4歳児保護者：5名

4歳児担任：1名（保育教諭経験年数17年）

※園長・主幹教諭が同席した

④連携・実践で活用したドキュメンテーションの概要

共同の活動をととして、自分の気持ちを伝える・相手の話を聞こうとする。

⑤連携・実践の経緯（話し合いの様子）

保育教諭側	保護者側
①ドキュメンテーションを提示して説明 内容・子どもの姿について ●運動会後の子ども同士の関わりの変化 ●集団での遊びの中で、子どもの心の動きやトラブル・ケンカの経験、友達との関わり等の協同体験が、今後の社会生活の基本的な土台となる「生き抜く力」へ	○内容説明では、うなずきながら聞く保護者と、無表情で聞いている保護者がいた
②説明後の様子 ●日頃の子どもの様子を伝えるとともに、家庭での子どもの様子を伺う ●子どもの思いを受け止めながら、子どもの意欲を大切に教育・保育をしている様子を話す ●ドキュメンテーションの活用法などについて伺う	○園であったことなど、自分から都合のいいように話す時があるので、友達とちゃんと遊べているか心配。ドキュメンテーションを見て、友だちとの関わりが見えて安心する ○写真は、自分の子どもが写っている確認している ○写真が増えてうれしい。以前より内容の完成度が上がっている。おたより等は行事のプログラムと一緒にファイルしている 将来子どもに見せる予定
③その他、ドキュメンテーションに対する意見・希望等 ●ドキュメンテーションは、保護者のかたとこども園とのコミュニケーションのひとつ。一緒に子育てを考えていきたい ●このような意見交換会が今後あったらどうか・パパの参加はどうか	○写真にのっていないなくても、「こんな友だちがいたんだ」という思いでになる ○写真と一緒に子どもの気持ちがわかる「吹き出し」があるのでわかりやすい ○写真を見て、自分の子どもが写っていると、その活動の中に入れていたと安心する ○おたよりだけでは、友だちと一緒に遊べているか、よくわからない

- ⑥考察（連携・実践を実施してみた感想、得られたこと等：子どもの姿への共通認識、保護者との関係性、保護者の意識の変化、保育者の学び、等）

実践3 もとしろ認定こども園

- ①連携・実践のねらい
(期待する保護者の姿、保育教諭の姿、関係性の変化など)
保護者の思いに気付くとともに、園での活動を理解してもらう。

- ②連携・実践の日時
平成28年10月1日（土）10：00～11：00
- ③ 連携・実践の参加者
3歳児保護者：7名
3歳児担任：1名（保育教諭経験年数10年）
※園長・主幹教諭が同席した
- ④連携・実践で活用したドキュメンテーションの概要
共同の活動をととして、自分の気持ちを伝える・相手の話を聞こうとする。
- ⑤連携・実践の経緯（話し合いの様子）

保育教諭側	保護者側
①ドキュメンテーションを提示して説明 内容・子どもの姿について ●天気に興味をもち、雨の日の様子や何がいるか等、生活に結び付けて考える姿へと変化 ●地図・天気予報にも興味をもち、自分たちで伝えあう姿があった ●子ども自身がコミュニケーションや判断する力が育ってきたが、その部分を保護者に伝えるにはどうしたらいいか悩んだ	○内容説明では、うなずきながら聞く保護者と、笑顔で聞いている保護者がいた。
②説明後の様子 ●日頃の子どもの様子を伝えるとともに、家庭での子どもの様子を伺う ●子どもの思いを受け止めながら、子どもの意欲を大切に教育・保育をしている様子を話す ●ドキュメンテーションの活用法などについて伺う	○写真を見て「これは○○ちゃん」「○○したんよ」など、友だちの名前を教えてくれたり、したことを話してくれたり会話が増えた ○何をしているのかが分かって嬉しい アルバムの代わりにしている ○子どものつぶやきや興味のあることから考えて、結果ここになるまでに段階を踏んでいることが分かった 先生の頑張りを他の人にも伝えていきたい ○子どもの関わり方のポイントがあるので、家でも同じように対応している
③その他、ドキュメンテーションに対する意見・希望等 ●ドキュメンテーションは、保護者のかたとこども園とのコミュニケーションのひとつ。一緒に子育てを考えていきたい ●このような意見交換会が今後あったらどうか・パパの参加はどうか	○ドキュメンテーションを見る時には活動が終わってしまっているので、「今こういうことに興味をもっている」等のリアルタイムな情報を知らせてはどうか ○A4紙面では難しいかもしれないが、来月の計画等を知らせてもらうとで、園と保護者との子どもの様子のやりとり等の連携がとりやすいのではないかと ○幼稚園もあり、いろいろな保護者がいるので、もっと教育的な部分をアピールしてもいいのではないかと

- ⑥考察（連携・実践を実施してみた感想、得られたこと等： 子どもの姿への共通認識、保護者との関係性、保護者の意識の変化、保育者の学び、等）

意見交換会をすることで、おたよりに対する多様な保護者の考えが分かった。また、保育教諭の説明を聞いてあの時の子どもの言葉や姿は、この園での活動があったからと、家庭での姿が園での活動と繋がっているのだと改めて理解してくれる姿もあった。園と家庭とが連携できるように、ドキュメンテーションを保護者と園とをつなげるツールとして活用していきたい。またアカウンタビリティーとしても活用していきたい。

実践4 こども園るんびにい

①連携・実践のねらい

園児たちがそれぞれの年齢で獲得して欲しい育ちを保護者と保育者がドキュメンテーションとアンケート・懇談会を通して知識を共有しあい園児たちだけでなく、親、保育者の成長にも繋げていく。

②連携・実践の日時

平成28年9月27日（火）13：30～14：30

③連携・実践の参加者

5歳児保護者：5名

5歳児担任：1名（保育教諭経験年数20年）

※副園長が同席した

④連携・実践で活用したドキュメンテーションの概要

美しくおはしを使う日本人への道のり（0歳児～5歳児クラス統一テーマ）

⑤連携・実践の経緯（話し合いの様子）

⑥ 考察

今回のドキュメンテーション・アンケート・懇談会といった3段階の取り組みを実施することで、園児の心身の成長に繋がることはいままでもないが、保護者にとっては我が子に改めて目を向けることが出来ているようだ。家庭でのかかわりやコミュニケーションの向上となっているように思われる。保育者にとっては保護者と共に同じ目標に向かって進める事が子どもの育ちにより良いものとして、向上していく子どもの姿を共に喜びあう事が明日への活力となっているようだ。そして一人ひとりの園児に対してのかかわり方や、違った角度から目を向けるようになっていく。

保護者と保育者のそれぞれが肩を並べて協力し合って進んで行くと、子育てや保育への喜びや・やる気・意欲をみいだす事に繋がっている。

保育教諭側	保護者側
①ドキュメンテーションを提示して説明 内容・子どもの姿について ●0歳児～5歳児クラスそれぞれが同じテーマのドキュメンテーションを提示した理由とアンケート実施した目的を保護者に説明する。 ②説明後の様子 ●説明後、ドキュメンテーションの内容に対して聞きたいこと、感じたことをお茶を飲みながら話してもらう。	○説明を熱心に聴いていた。 ドキュメンテーションを見ただけでは、解らなかった点があった様で、改めて理解できた部分があった様子だ。 ・ドキュメンテーションは良い取り組みですね。 ・今日のような懇談会を、各クラスで開いてくれるといいです。懇談会後個人との話し合いを持つことで、我が子がクラスの何処に位置するかが解り、子どもに対して応援したり足りない事へ、取り組む事も出来るのではないかな。
③その他、ドキュメンテーションに対する意見・希望をきく ●クラス懇談会をする事に対して保護者が参加することが負担にならないか	・我が子の事なので時間を作る事は当たり前、それを文句を言うのはおかしいと思う。参加したい人だけでも良いのでは？来ない人が損をするだけだから。 ・このようなドキュメンテーション・懇談会の取り組みはこれからもつづけて欲しい。

実践6 幼保連携型認定こども園 つるた乳幼児園

①連携・実践のねらい

送迎時の保護者からの声で子どもの自己主張や癪癢で悩んでいること（人）が多かったため2歳児の発達と園での様子を伝え合うことで子どもによりよい環境を提供できるようにするため

②連携・実践の日時

平成28年9月2日（金）19：00～20：30

③連携・実践の参加者

2歳児保護者 15名

2歳児担任 3名（保育教諭経験年数 20年・2年・0.5年）

④連携・実践で活用したドキュメンテーションの概要

「基本的生活習慣の様子、少人数での遊びの様子」

数日間、保育室の前にコメントと共に写真を貼り出し保護者に見てもらい、その後保育学校でその事について話し合いをし、子どもの発達について理解を深める。

⑤連携・実践の経緯（話し合いの様子）

保育教諭側	保護者側
①ドキュメンテーションを8月中旬頃に貼り出しておく。自由に感じた事を書き込める箇所を作り、付箋紙と鉛筆も置いた。当日は、提示して説明する ◎2歳児の子どもの発達、園の生活・遊びの中での、現在の子どもの発達、成長について、ドキュメンテーションにする ◎生活・遊びの中にある教育・保育についても一つ一つ具体的場面の写真を見せながら、保護者に分かりやすい言葉で説明する	・2歳児の子どもの発達の話は真剣に聞いている ・園での生活・遊びの様子を聞きながら、我が子が他の子と同じなのか違うのかが気になるのか、側にいる保護者同士でお互いの表情を確認する姿が見られた ・園の教育・保育の話題になると、全ての保護者が身をのりだして耳を傾けて聞く（とても興味、関心がある様子が見られた）
②説明後、ドキュメンテーションの内容に対して聞きたいこと、感じた事を話してもらう ◎まず、保護者から付箋紙で書き込みがあった内容を話題にあげた。同年齢の子どもを抱えている事で、同じ悩みの方も多く、共感しやすく保護者の方から次々話題があがり、話しやすい環境ができた ※全ての人の顔が見えるように丸くなって、マットに座る	◎2歳児の発達が分かり、また、他の保護者の方の話も聞いて、かんしゃく、甘えは皆がある事だと分かって安心した ◎一人で悩んでいたが、皆で話が出来てサッパリした ◎家とは違う子どもの様子が分かった ◎園での様子が言葉で聞くだけでなく写真で見る事で、一日の子どもの生活・遊びの様子がよく分かった ◎園の教育・保育がどういう事か分かった ◎食事、睡眠、生活リズムの大切さが分かった
③その他、ドキュメンテーションに対しての質問や希望を聞く	・付箋紙での書き込みは、いろいろな人の感じている事が分かり良かったので、次回もやってほしい ・ドキュメンテーションで取り上げている内容を見て話しする事で、一つ一つ相談しやすくなった。今後も続けてほしい ・簡単でよいので回数を増やしてほしい ・写真をもっと大きくしてほしい

⑥考察

日々の生活の中で成長していく我が子にどのようにかわっていいのか悩みつい子どもに大きな声を出したり、やみくもに叱りつけたり、親自身も自分を見失う中でドキュメンテーションを通して発達の道すじがわかり、自分の子どもを理解できるようになった。

また保護者の生活が以前に比べて平安になり、夫婦の

会話も心なしか多くなったと聞いた。

子どもも保護者も共に成長でき、子育て不安からの解消及び人間関係の深さにつながった。

実践7 中居林こども園

①連携・実践のねらい

気持ちをうまく表現できなかったり、相手の気持ちを理解するのが難しいときの関わり方や言葉の使い方について、園と家庭で話し合う機会をつくることをねらいとした。

②連携・実践の日時

平成28年10月29日（土）13：30～14：30

③連携・実践の参加者

5歳児保護者 8名

4歳児保護者 1名
主幹保育教諭 1名
5歳児担任 1名（保育教諭経験年数 3年）
5歳児副担任 1名

④連携・実践で活用したドキュメンテーションの概要

友達と仲良くする言葉探しや嫌な気持ちになる言葉探しの保育を設定した。「ちくちく言葉」と「ニコニコ言葉」と表題を付けどのような単語がそれに当たるかを子どもたちと話し合い、子どもから出たそれぞれ10程度の単語を表にし、園内の壁に貼り、みんなで意識していくことを話した。

⑤連携・実践の経緯（話し合いの様子）

保育教諭側	保護者側
③ドキュメンテーションを提示して説明する。（苦労したところ、楽しかったところ、驚いたところ、育った力など）	・説明を熱心に聞いていた。 ・うなずきながら聞いていた。
④説明後、ドキュメンテーションの内容に対して聞いたこと、感じたこととお茶を飲みながら話してもらう。	・子どもがどんな活動をしているのか、説明をしてもらって内容がわかりやすかった。 ・子どもをつい感情的に叱った時に我が子がそれは「ちくちく言葉」でそういう言葉を使うと僕が悲しくなるんだよ。「ニコニコ言葉」を使ってよ。と子どもに言われたときに、ドキュメンテーションを思い出し、子どもってちゃんと学んでいるのだと思い嬉しくなった。 ・家で子どもが話していることが、写真と説明を聞くことで一致することができてわかりやすかった。 ・家では見られない集団での姿が分かって嬉しい。 ・保育をしながら写真を撮ったり、このようにまとめたリしてドキュメンテーションを作るのは、先生方は大変だと思う。 ・ドキュメンテーションが出るまでは、親としては活動を子どもが楽しんで取り組んでくれればという思いはあるが、活動を通してどんな力が育っているのかまで考えたことはなかった。
⑤その他、ドキュメンテーションに対しての質問や希望を聞く。	・配慮を必要とする子どもがいるクラスの中で、お互いの気持ちをどう受け取り、どう表現するかをドキュメンテーションで、具体的に表現されていると、家でも我が子に接するときに、うまくはいかないけど内容を思い出すことがあるり、その時は少し冷静になれる。 ・今回ではないが、前に植物の観察のドキュメンテーションが出た時、園庭にない植物探しを家の周りで親子でやり見つけて園で友達や先生に子どもが報告したことを聞いた時は一緒に保育を楽しんだ気分になった。

	・写真のところにある吹き出し部分が、子どもの言葉やつぶやきになっていると、興味を持って見る事ができ、子どもの成長を実感した。 ・ドキュメンテーションを見ながら、子どもと一緒に話し合うこともでき、親子のコミュニケーションの機会にもなっている。 ・ドキュメンテーションを見るだけよりは、今のように説明と一緒に聞くと分かりやすいし、意見も出しやすい。 ・もっと理解したいので、ドキュメンテーションの中に出てくる難しい言葉（道徳性・規範意識など）や専門的な用語については説明が必要だと思う。
--	--

⑥考察

保護者との意見交換で、ドキュメンテーションの作り方の工夫やヒントをもらった。またドキュメンテーションを通して、日々の保育のねらいが、何らかの形で家庭の子育てにも影響し、それがまた園の保育にも反映されていることを知り、園と保護者との連携の様子を具体的に両方で確認することができた。

保育に関する情報の共有が、保護者と保育者の共通認識の部分と認識の違いについて明確に気付くことができた。

保護者との日々の会話の中で、行事より日々の保育内容の話題が増えた。保育者は伝えたい保育内容のポイントを分かりやすく簡潔にまとめる工夫をすることと、そのための学びの必要性に気付く。

3-6. 連携・協働実践の分析

今回は保育のドキュメンテーションを通しドキュメンテーションを作成した保育教諭と保護者が保育について語り合えるかと言うことを検証した。

今までの研究はどちらかと言うと園側からの一方的な発信性が高く、双方向で一つの保育を話し合うことが十分にできていなかったように思われる。これまでの研究では個々に、保護者からも沢山の意見をもらい活動に関して好意的に受け取ってもらい、その成果を見ることができたが、互いが面と向かって提示された保育の内容についてテーマを基に子どものために保育内容を語り合うのは難しいと思われた。

それは園側の保育に対する認識や知識と保護者の持つものとは差があると思われたからである。確かにそこに差が無くてはならないのが当然である。保育の専門家と言われ保育士と幼稚園教諭の二つの資格を持ち、日々多くの子どもを何年にもわたり保育した経験のある保育教諭と家庭で我が子を見ている保護者に専門家と同じ認識や知識を求めるのは無理な話であり、立場が違うことで意見は平行線をたどりかえって今後の保育に支障をき

たす恐れもあったからである。しかし子どもがより良く育ってほしいと思う根本のところでは共通しているはずなので、この部分に期待し研究を実施した。全国6か所の園が協力実践しその結果を得られた。

実践をする上で、まず園側としては、どの年齢の担当者が自分の作成したドキュメンテーションを説明するかが最初のポイントになった。各園おおよそ3年から5年の保育経験者が説明にあり、ドキュメンテーションの対象年齢は2歳から5歳で、ドキュメンテーションの内容はその園の日々の保育が記載されたもので、子どもの遊んでいる様子の写真と保育者のコメントと子どものつぶやきなどを通し子どもの育ちや学びが見えるようにしてある。

対象の保護者は多くの人数を集めるのではなく、各園のイベントの機会を利用し参加した中から今回の研究に賛同した保護者が対象になった。各園ともおおよそ5名～10名の保護者が参加した。今回は多くの発言を得るために研究として構えず雑談的で和やかな雰囲気作りも重要と考え茶菓子なども準備した。

この雰囲気作りが功を奏したかどうかは分からないが、予想していた以上に多くの発言を得られた。また10人以上が発言しやすい人数であったことも実践した各園から上がってきた。

まず担当者がドキュメンテーションの説明をしている間、保護者は必ずしも自分の子どものクラスの発表ではなかったが、どの園においても私語が入ることなく熱心に説明を聞いていた。テーマが決められていることで、保護者からの発言が少なかったり、テーマから逸脱し否定的な意見が出るのではと心配していた面もあったが、どの園においても積極的に前向きで発展的な意見が多く、1時間の話し合いを予定していたが実践を行った全ての園が予定の時間を超え楽しく保育自体について語らう様子が見られた。

保護者からは、「園がドキュメンテーションという発信方法を取った意味が良く分かった」

「子どもが園の生きるという保育から学び、家庭でも動くや生きるということへの探究心を表すようになった」「ドキュメンテーションの吹き出しに書かれた子どものつぶやきを見て、家庭での我が子の学びの発言に気付くようになった」など、今までに聞けなかったより深い感想や意見が聞けたことは大きな成果のように思う。また実践を行ったある園では、子ども同士の喧嘩について喧嘩を否定的に捉えるだけではなく、生きる力を得るためにもその中から学ぶものがあるのではないかなど、保護者同士が保育や子どもの発達について意見を出し合い互いの考えを受容する様子が見られた。これは保育者→保護者の一方向の構図ではなく保育者←→保護者←→保護者←→保育者の構図がそこにあり、まさに研究が目指した保育のドキュメンテーションの姿である連携・協働の構図が出来上がっていた。このような保育に対する保護者の感想から今後の保育の向上へのヒントをもらった気がする」と研究に携わった保育担当者も前向きにとらえることができていた。保育そのものについて、保育担当者と保護者が垣根を低くし語り合うということは、ドキュメンテーションの最高の活用方法であると同時に、園や家庭の保育の向上と子育ての協働を目指す上でも重要な役割を果たしてくれるものと考ええる。

課題としてはより良いものを目指す上で、連携・協働の媒体となるドキュメンテーションの作成方法や作成に要する時間の確保、内容の充実のための保育士の力量の向上などがあげられる

4. ドキュメンテーションを媒体とした園と家庭の連携・協働実践への展望

今回はドキュメンテーションを媒体としたが、その他にも様々な手法が存在するはずである。保育者の力量と保護者の特性に応じて選択して良いが、今回のドキュメンテーションを媒体とした手法が保育の中身を伝達する視点としてふさわしく、保護者に理解されることにもっとも適しているのではないだろうか。

あくまでも目的は園と家庭の連携を図ることにあるので、その中でも効果的な方法の一つとして提案したい。

コミュニケーションの向上が、園・家庭ともに子どもを同じ視点で育てるという意識が生まれ、ややもすれば子育て方針のズレから生じる様々な不協和音が解消し、「共に育てる」をキーワードに言葉だけの理念・方針が実践へ進む可能性があり、その発端をつくる手法としてドキュメンテーションを利用することが、限らない発展をもたらすきっかけとして協働実践への入り口となりえる。

もともとどんな発達効果があるかを見える形で発信するドキュメンテーションであるが、保育の中身の可視化だけでなく、保護者とのコミュニケーション向上がもたらす親育ち、さらに意識協働による子育て子育ちにまで

波及することを考えると、保護者へ子育て講座を提供するより大いに効果的なものである。保育者と保護者のパートナーシップで子育てをする、といった理想形に近づく媒体といえるものであり、作成の仕方によっては更なる発展も含んでいると言える。

5. おわりに

幼児教育の施設において、保護者に対し園の保育理念や、日々の保育の様子を何らかの形で発信し、その理解を求める努力は今までも十分にしてきたところであるが、保育者側と保護者が自分の園の教育・保育の実践を通し子どもの成長発達を促す保育の内容の在り方について、それぞれの視点で語り合い理解し合う機会を作り出すことは非常に難しいことと考えられた。

その要因の一つは、保育者と保護者の立ち位置である。同じものを見ても見方が違い、教育・保育を提供する側とされる側、また子どもを預かる側と預ける側、個人と集団の環境からくる子どもの行動の違い、また保育所であれば、日本独特の事情から保育所は養護的関わりが中心で、保育所に乳幼児教育を求めているとはいえないといった傾向があることで、施設側と乳幼児教育について語ることは物の受け取り方の違いから乗り越えるべき壁が多すぎるという認識により、真に子どもの成長や保育の内容について語り合えるか、疑問が両者にあった。

また、ドキュメンテーションを通して見えた保育について、単に良い、悪いの評価のし合いではなく、日々の保育から子どもが何を学び、どのような力を獲得しているのか、また子どもにとってより良い成長とは何であるかを語らいの中で見出し、周りの大人がそれぞれの立場でどのように施設の子どもの保育に関わり支援すべきかなどのために発展性のある前向きで有益な場が成り立たなければ、これらの場は保育者側、保護者側の互いの立場の主張に終わり、互いの信頼性を損なう危険をはらんでいた。

しかし今回の研究によりその心配は払拭され、今後の施設と保護者による協同の子育ての新しい方向性が見えた。

ただ今回の結果を導き出すにはそう簡単ではなく、一朝一夕に成り立つものではなく、5年間の段階的取り組みがあつてこそであり、子どもを中心として保護者と保育者の三者が共にドキュメンテーションを媒体として成長してきたからである。

ドキュメンテーションというツールは、施設の教育に関しての情報発信だけではなく、保育者の保育の観察力、保育技術や保育の質の向上、研修の材料、指導計画の評価の充実、子どもの発達支援や子育て支援の充実、PDCAサイクルの確立等々多くの方面に効果的な影響を与えることが証明された。

忙しい日々の保育の中で、ドキュメンテーションの作

成は労力と時間を必要とするかもしれないが、努力以上の成果をその後の乳幼児の教育・保育施設に与える。

保育の現場にドキュメンテーションという環境があるのと無いのでは乳幼児の教育や保育士の力量のどこかにいずれ差は表れてくる。これは保育者のキャリアアップにも大いに貢献するはずである。

今後幼児教育の現場において、保育のドキュメンテーションの作成能力は保育士の一つの力量として位置づけられることだろう。

今回の研究に長期にわたり参加協力をして頂いた、施設及び園長、職員、保護者の皆様に心より感謝を申し上げます。終わりの言葉とする。

研究協力者（所属）

菊地	義行	（境いずみ保育園）
東口	房正	（ふじが丘保育園）
福澤	紀子	（こども園つるた乳幼児園）
田和	由里子	（春日保育所）
只野	裕子	（こども園あおもりよつば）
岩橋	道世	（こども園るんびにい）
筒井	桂香	（もとしろ認定こども園）